

平成21年6月8日現在

研究種目：基盤研究（C）
 研究期間：2006～2008
 課題番号：18520144
 研究課題名（和文） 小沢蘆庵収集「写本家集」（百科集）の研究
 研究課題名（英文） A Study of Shahon-Kashu (Hyakkashu): collected by Ozawa Roan.

研究代表者
 曾根 誠一（SONE SEIICHI）
 花園大学・文学部・教授
 研究者番号：20187892

研究成果の概要：

主要伝本のコピーに、書き入れ等の朱・青筆の区別を記入する作業を完了し、それを踏まえて、蘆庵本の特徴を判断する基礎データを24家集について収集した。その結果、伝本には臨模本と校訂本の2系統があることと、伝本間の親疎関係を解明した。また、入江昌喜所蔵家集が全て蘆庵本になった訳ではないことを、『俊頼集』を事例して証明した。

交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2006年度	500,000	0	500,000
2007年度	500,000	150,000	650,000
2008年度	400,000	120,000	520,000
年度			
年度			
総計	1,400,000	270,000	1,670,000

研究分野：文学

科研費の分科・細目：日本文学

キーワード：小沢蘆庵、写本家集、百家集、伝本調査、入江昌喜

1. 研究開始当初の背景

江戸時代後期、京都で活躍した小沢蘆庵は、弟子や周辺の人々の協力を得て、平安・鎌倉期の版行されなかった家集を主として、82家集の収集をめざした。

だが、家集数が膨大であったことや、貸し出し先で火災にあって焼失するなど、常に全家集が完備していた訳ではない。欠けた家集の補填は、試み続けられている。

蘆庵の生前から、希望者には貸し出されて転写され、死後は、新日吉御所に奉納されて、藤島宗順の管理の下、生前同様の方法で転写

され、門人や国学者達に流布、享受されることとなった。

ただ、膨大な家集の集成故に、現存する伝本は、多くの大学図書館や文庫などに分散して所蔵され、完揃いの伝本がある訳ではない。

加えて、一部の伝本稀少家集を除けば、本文自体は当時の流布本であり、必ずしも善本とは言いがたいものが多く、家集の伝本研究でも、注目されることは少なかった。

こうした事情から、「写本家集」の研究は、文庫調査等の折の発見として、久曾神昇氏（1937年）・井上宗雄氏（1977年）が伝本

の存在を報告されたものに留まっていたが、大取一馬氏(1983年)が河野美術館本47家集・龍谷大学写字台文庫本41家集を再調査され、新たに新日吉神宮蔵蘆庵文庫本6家集・京都大学文学研究科本15家集と「写本家集目録」(蘆庵文庫蔵、蘆庵・宗順各自筆)の存在を発見された。ここに、伝本研究の基礎が確立したのである。

その後、曾根誠一(2006年)が花園大学特別個人研究費で調査し直した結果、東海大学桃園文庫本14家集(河野美術館本のツレ)、国文学研究資料館本50家集、甲賀市立水口図書館本38家集、東京大学本居文庫本31家集、宮内庁書陵部8家集、ノートルダム清心女子大学本8家集、九州大学萩野文庫本4家集、大取一馬氏蔵2家集の存在を、新たに追加することができた。

『海人手古良集』『伊勢大輔集』『小馬命婦集』『頼実集』という一部伝本については、入江昌喜旧蔵本との本文・書き入れ等の比較も含めて、検討を試みたが(2004~2005年)、全体像を把握するための悉皆調査は、未着手のままであった。

2. 研究の目的

江戸時代後期に、蘆庵が収集した「写本家集」が地下歌人や国学者等に広く流布し、平安・鎌倉期の未版行家集の享受に大きな役割を果たした。

その実態を解明するための前提となる基礎的研究として、多くの家集を所蔵する主要な伝本を悉皆調査し、本文・傍記・書き入れ・集付等の特徴を把握し、蘆庵本の基礎データを収集することを目的とする。

具体的には、『伊勢大輔集』『弁乳母集』に寛政3年8月の蘆庵自筆識語が記されていることから、蘆庵手沢本と判断される「紅梅文庫旧蔵本」(河野美術館所蔵47家集+東海大学桃園文庫所蔵14家集)と新日吉神宮蔵蘆庵文庫本6家集(蘆庵自筆と称される)を基盤に据えながら、国文学研究資料館本50家集、甲賀市立水口図書館本38家集、東京大学本居文庫本31家集、京都大学文学研究科本15家集等との親疎関係を解明する。

また、この作業を通して、判明した事実に基づいて、入江昌喜旧蔵家集との比較・検討を行い、両者の関連を解明するとともに、蘆庵本の成立過程を明らかにし、昌喜の果たした役割について、位置付けることを図る。

また、天理大学図書館蔵横山由清本13家集・川越市立図書館蔵清水浜臣本12家集との関連も調査し、蘆庵本享受の一端を解明する。

3. 研究の方法

伝本調査を研究の基盤に据えて、主要な伝本の悉皆調査を実施した。

その際、基準としたのは、蘆庵手沢本と判断される紅梅文庫旧蔵本(河野美術館所蔵47家集+東海大学桃園文庫所蔵14家集)であり、この写本コピーに、朱・青筆での書き入れの区別を記入しながら、新日吉神宮蔵蘆庵文庫本、国文学研究資料館本、甲賀市立水口図書館本、東京大学本居文庫本、京都大学文学研究科本等との異同を把握した。

歌数の少ない家集については、校本ノートを作製し、本文・傍記・書き入れ・集付等の異同を把握し、親疎関係を解明した。

歌数の多い家集については、書き入れ・集付の異同を悉皆調査し、本文・傍記については、顕著な事例の検討に留めざるを得なかった。

こうした校本ノートや書き入れ・集付の調査結果に基づいて、現存が確認されている入江昌喜旧蔵家集と比較・校合し、両者の関連を検討した。

4. 研究の成果

①伝本研究の基盤となる蘆庵手沢本である紅梅文庫旧蔵本のうち、河野美術館蔵47家集については、入手した写本コピーに、朱・青筆での書き入れの区別を記入する作業を完了した。そのツレである東海大学桃園文庫蔵14家集については、コピーの許可が得られなかったため、校本ノートに筆写し、この作業も完了した。

また、龍谷大学写字台文庫本41家集、甲賀市立水口図書館本38家集、東京大学本居文庫本31家集、京都大学文学研究科本15家集、川越市立図書館本12家集、新日吉神宮蔵蘆庵文庫本6家集についても、入手した写本コピー及び複製本に、朱・青筆での書き入れの区別を記入する作業を完了し、研究のための基礎を固めた。

尚、国文学研究資料館本50家集については、予算の制限もあり、写本コピーを入手できず、必要に応じて筆写するに留めざるを得なかった。

この結果、平安期の家集には、朱・青筆での書き入れが多く見られ、鎌倉期の家集には、少ないことが判明した。

②校本ノートによって、本文・傍記・書き入れ・集付等の特徴を把握し、蘆庵本であるか否かを判断するための基礎データの収集を実施した。但し、歌数の多い家集については、書き入れ・集付の異同は悉皆調査したが、本文・傍記については、顕著な事例に限定せざるを得なかった。

調査済み家集は、元良親王集・千里集・師輔(九条右大臣)集・高明集・師氏(海人手

古良)集・恵慶法師集・山田法師集・安法法師集・実方集・相如集・公任集・匡衡集・伊勢大輔集・小馬命婦集・俊頼(散木棄歌)集・道成集・頼実(故侍中左金吾)集・在良集・成仲集・広言集・忠度集・二条院讃岐集・大納言典侍為子集・兼行集の24家集である。

③蘆庵本の伝本には、仮名遣いの訂正傍記や本文のミセケチ、異本注記や書き入れ、集付、上欄注、行間の広狭に至るまで、全て原本の通りに書写してある「臨模本」の系統と、明らかな誤りや仮名遣いについては、校訂して書写してある「校訂本」の系統の2種類があることが判明した。

「臨模本」系統に所属するのは、蘆庵文庫本、河野美術館本・桃園文庫本(紅梅文庫旧蔵本)、写字台文庫本、国文学研究資料館本、本居文庫本、京都大学本であり、「校訂本」系統に属するのは、水口図書館本、川越市立図書館本、天理図書館本である。

④「臨模本」系統の伝本では、蘆庵文庫本が最も誤写が少なく、手沢本の河野美術館本・桃園文庫本(紅梅文庫旧蔵本)がこれに次ぐ。これは、手沢本となった写本の書写の質の問題であろう。これに、写字台文庫本、京都大学本が次ぐ。国文学研究資料館本と本居文庫本は、傍記や書き入れ等に漏れ(意図的省略款)による若干の相違が見られ、前の4伝本とは距離があり、別のグループに分けることが可能である。そして、本居文庫本は、国文学研究資料館本の転写本と判断される。

⑤「校訂本」の系統の伝本は、いずれも江戸時代後期の国学者の旧蔵本である。

水口図書館本は、蘆庵の弟子前波軒黙に師事した近江水口の庄屋池本頭実が、文化12年4月に書写した写本だが、字間と行数を詰め、墨も薄くして、儉約に努めた様子が窺われる。尚、関西大学図書館に、黙軒自筆の『公任集』(臨模本)が所蔵されているが、元来善本とは言い難い本文であるのに加えて、誤写が散見される。頭実は、黙軒所蔵の蘆庵本を借りて書写した可能性が高かろう。

川越市立図書館本は、清水浜臣自筆にかかる写本だが、本文や傍記・書き入れ等の特徴から、本居本の転写本を親本として書写した可能性が高いことが、『実頼集』『道長集』の検討から判明した。

天理図書館本は、横山由清自筆にかかる写本だが、9家集全てが蘆庵本なのではなく、師氏集は蘆庵本であり、実頼集・道長集については、非蘆庵本であることを確認した。由清は、井上文雄等の友人から写本を借りて書写していることが、識語で確認できるのであり、蘆庵本家集を一括して入手できる立場にはなかったようである。蘆庵本の流布を考え

る時の参考になるかも知れない。

⑥蘆庵「写本家集」と入江昌喜所蔵家集との関連では、既に論じた『師氏集』『頼実集』『伊勢大輔集』『小馬命婦集』に加えて、ノートルダム清心女子大学所蔵の昌喜旧蔵本『千里集』『道長集』『忠盛集』を調査したが、前の2家集については、岸本由豆流の朱筆書き入れがあり、昌喜との識別が困難である。

また、新たに関西大学図書館蔵の昌喜旧蔵『忠度集』『二条院讃岐集』を見出したが、『忠度集』については、誤写が多く、書き入れにもかなりの相違が見られて、昌喜所蔵家集が全て蘆庵本として採用された訳ではないことを確認した。

⑦蘆庵本『俊頼(散木棄歌)集』には、蘆庵による安永8年1月10日付の書写奥書があるのだが、国文学研究資料館本と関西大学図書館本・水口図書館本・架蔵本とで、若干の異同が見られる。前者には「右散木棄歌集三巻者。何某珍藏以本。令新写校合畢」とあり、後者には「右散木棄歌集三巻。詠讃岐守宗美。令新写校合畢」とある。

本文・異本注記及び傍記・『頭昭註』の付注・集付・上欄注を検討した結果、国文学研究資料館本は、蘆庵「初稿本」と称すべき伝本であるが、本文に欠脱や誤写等の問題を包含していたことから、蘆庵が神服宗美に命じて再度書写・校合せせたものが、関西大学図書館本・水口図書館本・架蔵本であり、「再稿本」と称すべき伝本であることが判明した。

この結果と、初雁文庫旧蔵にかかる入江昌喜旧蔵『散木棄歌集』(国文学研究資料館本)との関連を、本文・異本注記及び傍記・集付・『頭昭註』の付注・上欄注の比較を通して検討したところ、昌喜本の本文は、蘆庵「初稿本」とは一致せず、「再稿本」にほぼ一致すること。上欄注は、蘆庵本のいずれともほとんど一致せず、書き入れ・傍記にも異同が多く見られたことから、昌喜本と蘆庵本の間には、直接の書承関係はないものと判断された。

両者に共通する同一祖本の書き入れを、手もとの写本に別個に転写し、それぞれ独自に異本注記及び傍記・『頭昭註』の付注・集付・上欄注を増補したものが、昌喜本であり、蘆庵初稿本としての国文学研究資料館本であったということなのであろう。

こうした『散木棄歌集』の例も、昌喜所蔵家集が全て、蘆庵本家集として取り込まれた訳ではないことを、如実に証明している。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 4件)

①曾根誠一、小澤蘆庵の家集収集と入江昌喜(三) — 『散木棄歌集』の検討(下)、花園大学日本文学論究、1号、23/43、2008、査読無

②曾根誠一、入江昌喜と「旧本」「古本」家集・再説—関西大学図書館所蔵『歌仙家集』による再検討、解釈、54巻9・10号、41/49、2008、査読有

③曾根誠一、小澤蘆庵の家集収集と入江昌喜(三) — 『散木棄歌集』の検討(上)、花園大学国文学論究、35号、1/17、2007、査読無

④曾根誠一、入江昌喜と「旧本」「古本」家集—江戸後期の西本願寺本系統「三十六人集」享受一端、解釈、53巻9・10号、41/49、2007、査読有

[学会発表] (計 0件)

[図書] (計 1件)

井上佳奈、大柿学、齊藤比登美、谷口知子、大東あつこ、西山侑理、畑真由美、近藤正佳、金森みよ、曾根誠一、私家版、異名分類抄(翻刻)、2007、1/134

[産業財産権]

○出願状況(計 0件)

○取得状況(計0件)

[その他]

なし

6. 研究組織

(1)研究代表者

曾根 誠一 (SONE SEIICHI)
花園大学・文学部・教授
研究者番号：20187892

(2)研究分担者

なし

(3)連携研究者

なし